論　文

会計言語と実験哲学

Accounting as Language and Experimental Philosophy

水　谷　　覚
MIZUTANI Satoru

はじめに

会計を「事業の言語（the language of business）」とみる考えは定着している[1]。会計を言語の一種としてみるのであれば、現実の人間がどのように会計という言語（会計言語：accounting as language）を用いるのかについての被験者実験（実験会計学）研究を行う際にも、言語分析の方法や人間観を援用することは有用であろう。

水谷（2010）では、実験会計学における方法論のモデル化を、理論モデルが前提とする人間観（会計行動のモデル）に対する目的適合性の基準にもとづいて行い、資本市場や組織などの現実社会における会計の制度設計に貢献することを試みた。そこでは、現実の人間の会計行動を予測し説明するためのモデルとして、前提となる人間観の違いによって、「効用最大化モデル（合理的人間観）」、「限定合理性モデル（限定合理的人間観）」、「社会関係性モデル（状況依存的人間観）」という 3 つの会計行動のモデルが提示されている[2]。

本稿では、水谷（2010）で提示された人間観を、会計における言語分析の観点から検証するとともに、現実の人間の会計行動への理解をより深めるために、実験哲学という新しい研究領域において明らかにされつつある現実の人間の直観についてのあり方（人間観）を検証する。

---

[1] たとえば、会計学の入門テキストである『アンソニー会計学入門【第 2 版】』においても、冒頭で「会計は言語の一種です」という言葉から始められている。

[2] ここで、「効用最大化モデル（合理的人間観）」と「限定合理性モデル（限定合理的人間観）」は合理性（効用最大化）という「大きな物語」を志向しており、近代的合理主義や方法論的個人主義にもとづくモダニズム（近代科学）モデルである。モダニズム（近代科学）モデルでは説明や予測をすることができない現実社会の現象に対しては、ポストモダニズム（社会的構築主義）モデルである「社会関係性モデル（状況依存的人間観）」を用いることになる。

みずたに　さとる（経営情報学科）

1　会計言語と人間観

会計は、商業の歴史とともに形成されてきた慣行（コンベンション：convention）としての性格が強い。その意味においては、会計はHayekがいうところの「自生的秩序（spontaneous order）」であり[3]、会計を言語の一種（会計言語：accounting as language）としてみることは、言語自体が自生的秩序としての性格が強いことからも妥当であろう。

実験会計学の主な目的は、現実の人間行動に対して、より適合的な会計の制度を設計することにある。そこで本稿では、会計言語によってフレーミング[4]される現実の人間の会計行動を理解するために、まず言語分析における人間観を明らかにする[5]。

言語分析は、３つのアプローチによって理論的平面が構成されている。すなわち、統語論（あるいは構文論、syntax）、意味論（semantics）、語用論（pragmatics）である。そして、言語分析においては、あるものが記号として機能していく過程に、話し手（あるいは言語の使い手、speaker）、表現（expression）、表現の指示対象（designatum）という３つの要素が含まれる。

統語論とは、記号相互間の形式的（論理的）関係だけを取り扱うものであり、話し手の存在が捨象されているので人間観が介入する余地はない。意味論とは、記号とその指示対象との関係を取り扱うものであり、ここでも話し手の存在は捨象されているので人間観が介入する余地はない。話し手あるいは言語の使い手が明示的に取り入れられるのは、語用論においてである。語用論では、記号とその利用者（話し手あるいは使い手）との関係に注目する。

言語分析において、統語論、意味論、語用論の３つのアプローチは、ひとつの統合的過程として機能する言語をそれぞれの平面に分けて考察するが、言語分析的な方法によって、会計言語とその使い手である現実の人間との関係を考察するためには、語用論のアプローチによる必要がある。田中（1995）によれば、「言語の使用者は人間であるから、言葉の行動的意味や目的は話し手がおかれている状況によって左右される。そのため、語用論は言語が機能しているときに生ずる心理的、生理的、社会的現象等のすべてを取り扱わなければならない。」とされる（田中, 1995, p.8）。語用論のアプローチによることで、水谷（2010）で提示された3つの人間観における会計行動のモデルを包括的に考察することができる。特に、近代的な合理性の基準によらない「社会関係性モデル（状況依存的人間観）」による会計行動は、現実の人間行動のなかでも一般化された説明や予測が困難であり、より安定的で頑健な制度の設計を行うために、語用論のアプローチを

---

[3] Hayekの自生的秩序の概念については、森田（2009）に詳しい。

[4] ここでフレーミング（framing）とは、言語によって、あるコンテキスト（状況や文脈）が特定化されることをいう。実験会計学におけるフレーミングの問題については、山地（2008）に詳しい。

[5] ここでの考察は、田中（1995, pp.7-9）に依拠している。

取り入れることによって状況依存的な人間行動に対する理解を深めることは有効である。

次に、現実の人間の会計行動への理解をより深めるために、実験哲学という新しい研究領域において明らかにされつつある現実の人間の直観についてのあり方（人間観）を検証する。

2　実験哲学とは

実験哲学[6]（experimental philosophy）とは、数年前から北米を中心として世界的に広がりつつある哲学研究の一領域であり、主に人間の直観（intuitions）に関する経験的研究（被験者実験）を行い、その結果についての哲学的考察を深めることによって研究が進められるものである。下記のように幅広い関心領域を持っているので、明確な定義は困難である。本稿では、ひとまず、「実験的研究という方法論が媒介となって行われている人間の直観に関する学際的研究の総称」として捉えておく。

実験哲学の関心領域は、意識（consciousness）、文化的多様性（cultural diversity）、決定論と道徳責任（determinism and moral responsibility）、認識論（epistemology）、意図的行為（intentional action）などであり、それらの関心領域を媒介として、哲学（philosophy）、心理学（psychology）、人類学（anthropology）、法学（law）、神経科学（neuroscience）などとのコラボレーションによって成立している（Knobe 2007, p.120）。

Knobe（2007）によれば、実験哲学が関心を向けるテーマは、人間の精神はどのように働くのか、人間の精神は部分へと分けられるのか、その部分はどのように相互作用し合うのか、ある知識の発見は学んだもの（learned）か、それとも生得（innate）のものか、といったようなものである（Knobe 2007, p.120）。

実験哲学は、人間の精神の働きや直観あるいは民間概念[7]（folk concepts）に関心を向けるという意味では、本来の哲学的伝統への回帰運動として位置付けることができる（Knobe and Nichols, 2008, Chap.1）。

実験哲学が登場した背景としては、20世紀の哲学として特に英語圏で盛んになった分析哲学（analytic philosophy）が言語や論理についての技術的（technical）な議論を強調

---

[6] わが国においては、実験哲学の取り組みは始められたばかりであり、訳語が定着していない。わが国において初めて本格的に実験哲学の研究が取り上げられたのは、International Conference How and why economists and philosophers do experiments: dialogue between experimental economics and experimental philosophyにおいてである（於：京都産業大学、2010年3月）。本稿が実験哲学の用語を日本語訳するにあたっては、この国際会議における笠木雅史氏（カルガリー大学）の報告を参考にさせていただいた部分が大きい。ここに記して感謝申し上げたい。
なお、この国際会議のウェブサイトのアドレスは以下のとおりである。
http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/project/orc/execo/conf2010/index2010.html（2010年10月17日現在）

[7] ここでは、「一般市民的な感覚」という意味で理解されたい。

してきたこと、つまり思考の論理的明晰さを志向する実証主義に傾倒する「安楽椅子（armchair）の哲学」に向かっていることへの反発もある。

Nadelhoffer and Nahimias（2007）によれば、実験哲学には、実験的分析、実験的記述主義、実験的制約主義という 3 つの立場がある（Nadelhoffer and Nahimias, 2007, pp.126-128）。

まず、実験的分析（Experimental Analysis）の主な目的は、一般人（ordinary people）にありがちな直観について、統制された体系的な方法で探究することと、それらの直観の哲学上の議論に対する適合性を探求することにある。

次に、実験的記述主義（Experimental Descriptivism）の主な目的は、直観のもととなる心理的プロセスや認知メカニズムの本質をより理解することによって、その哲学上の問題に対する重要性を探求することにある。

最後に、実験的制約主義（Experimental Restrictionism）の主な目的は、一般人（ordinary people）の直観が多様性や不確かさを持っていることに関する経験的な証拠を集めることによって、哲学者の分析的な伝統のなかで当然のごとく専門的に取り組んできた方法や技術のいくつかが揺さぶられるということを示すことにある。

ただし、これらの立場は明確に区分されるものではなく、同じ研究者が（ある程度の傾向性はあるものの）論文ごとに立場が違っていることも少なくない。

3　Knobe（2003）の実験

ここでは、実験哲学の実験例として、Knobe（2003）の実験例を紹介し、その追実験を実施した結果について明らかにする。

Knobe（2003）は、意図的行為（intentional action）に関する 2 つの実験、実験 1（first experiment）と実験 2 （second experiment）を行っている。

実験 1 （first experiment）[8]

被験者は、マンハッタンのある公園でくつろいでいた男女78名で、自然環境破壊ケース（harm condition）と自然環境改善ケース（help condition）という 2 つのケースのどちらかの場面設定（vignette）をランダムに提示され、それぞれ以下の質問に答えた。

自然環境破壊ケース（harm condition）

問 1

会長（chairman）の行為がどの程度の非難（blame）に値するのか。

（0 ～ 6 の尺度で評価）

[8] この実験については、YouTubeで関連する動画をみることができる。
http://www.youtube.com/watch?v=sHoyMfHudaE（2010年10月17日現在）

問 2

会長（chairman）は意図的（intentionally）に自然環境を破壊したと思うか。

（Yes / No）

自然環境改善ケース（help condition）

問 1

会長（chairman）の行為がどの程度の賞賛（praise）に値するのか。

（0 ～ 6 の尺度で評価）

問 2

会長（chairman）は意図的（intentionally）に自然環境を改善したと思うか。

（Yes / No）

自然環境破壊ケース（harm condition）の場面設定（vignette）

The vice-president of a company went to the chairman of the board and said, 'We are thinking of starting a new program. It will help us increase profits, but it will also harm the environment.'

The chairman of the board answered, 'I don't care at all about harming the environment. I just want to make as much profit as I can. Let's start the new program.'

They started the new program. Sure enough, the environment was harmed.

自然環境改善ケース（help condition）の場面設定（vignette）

The vice-president of a company went to the chairman of the board and said, 'We are thinking of starting a new program. It will help us increase profits, and it will also help the environment.'

The chairman of the board answered, 'I don't care at all about helping the environment. I just want to make as much profit as I can. Let's start the new program.'

They started the new program. Sure enough, the environment was helped.

実験 1 （first experiment）の結果[9]

自然環境破壊ケース（harm condition）では、82%の被験者が会長（chairman）は意図的（intentionally）に副作用（自然環境の破壊）を引き起こしたと答えた。

自然環境改善ケース（help condition）では、77%の被験者が会長（chairman）は意図的（intentionally）に副作用（自然環境の改善）を引き起こしていないと答えた。

統計的にも有意な検定結果が出た（X^2（1, N=78） =27.2, p<.001.）。

[9] Knobe（2003）では、問 2 の結果のみが明らかにされており、問 1 の結果については実験 2 （second experiment）のデータと合せて統計処理されている。

実験１（first experiment）から得られた知見（インプリケーション）

道徳的に悪い副作用（side effect）があると思われる行為（自然環境破壊ケース）に対しては、多くの被験者が意図的な行為（intentional action）であると判断した。

道徳的に良い副作用（side effect）があると思われる行為（自然環境改善ケース）に対しては、多くの被験者が意図的な行為（intentional action）ではないと判断した。

２つのケースの場面設定（vignette）は、“harm”と“help”という単語以外は、ほとんど同じ文章である。質問に対する被験者の回答について、２つのケースの間に有意差が検出されたことにより、人々の一般的な感覚として、ある行為に対する善悪の判断は、その行為がもたらす結果に依存するということが明らかになった。

Jones（2009）によると、この実験結果から得られた知見（インプリケーション）は、今日では“Knobe effect”として、あるいは“Side-Effect Effect（副作用効果）”として知られている。

実験２（second experiment）

実験２（second experiment）は、実験目的は実験１（first experiment）と同様（意図的行為に対する被験者の判断についてのデータを収集すること）であるが、実験１で明らかになった知見（Knobe effectあるいはSide-Effect Effectと呼ばれているもの）の普遍性を検証するために実施された。

被験者は、マンハッタンのある公園でくつろいでいた男女42名で、砲撃ライン突入ケース（harm condition）と砲撃ライン脱出ケース（help condition）という２つのケースのどちらかをランダムに提示され、それぞれ質問に答えた。

砲撃ライン突入ケース（harm condition）

問１

上官（lieutenant）の行為がどの程度の非難（blame）に値するのか。

（０～６の尺度で評価）

問２

上官（lieutenant）は意図的（intentionally）に兵士たちを敵の砲撃ラインに送ったと思うか。（Yes / No）

砲撃ライン脱出ケース（help condition）

問１

上官（lieutenant）の行為がどの程度の賞賛（praise）に値するのか。

（０～６の尺度で評価）

問２

上官（lieutenant）は意図的（intentionally）に兵士たちを敵の砲撃ラインから脱出さ

せたと思うか。（Yes / No）

砲撃ライン突入ケース（harm condition）の場面設定（vignette）

A lieutenant was talking with a sergeant. The lieutenant gave the order: ‘Send your squad to the top of Thompson Hill.’

The sergeant said: ‘But if I send my squad to the top of Thompson Hill, we’ll be moving the men directly into the enemy’s line of fire. Some of them will surely be killed!’

The lieutenant answered: ‘Look, I know that they’ll be in the line of fire, and I know that some of them will be killed. But I don’t care at all about what happens to our soldiers. All I care about is taking control of Thompson Hill.’

The squad was sent to the top of Thompson Hill. As expected, the soldiers were moved into the enemy’s line of fire, and some of them were killed.

砲撃ライン脱出ケース（help condition）の場面設定（vignette）

A lieutenant was talking with a sergeant. The lieutenant gave the order: ‘Send your squad to the top of Thompson Hill.’

The sergeant said: ‘If I send my squad to the top of Thompson Hill, we’ll be taking the men out of the enemy’s line of fire. They will be rescued!’

The lieutenant answered: ‘Look, I know that we’ll be taking them out of the line of fire, and I know that some of them would have been killed otherwise. But I don’t care at all about what happens to our soldiers. All I care about is taking control of Thompson Hill.’

The squad was sent to the top of Thompson Hill. As expected, the soldiers were taken out of the enemy’s line of fire, and they thereby escaped getting killed.

実験２（second experiment）の結果

砲撃ライン突入ケース（harm condition）では、77%の被験者が上官は意図的に副作用（兵士たちの死）を引き起こしたと答えた。

砲撃ライン脱出ケース（help condition）では、70%の被験者が上官は意図的に副作用（兵士たちの生還）を引き起こしていないと答えた。

統計的にも有意な検定結果が出た（X^2（1, N=42）＝9.5, p<.01.）。

実験２（second experiment）から得られた知見（インプリケーション）

実験２（second experiment）においても、実験１（first experiment）と同様の結果がみられた。

そこで、２つの実験を統合したデータについて統計的検定を行った結果が以下である。

自然環境破壊ケースと砲撃ライン突入ケース（harm condition）における非難（blame）の程度の平均は4.8であり（M=4.8）、自然環境改善ケースと砲撃ライン脱出ケース（help condition）における称賛（praise）の程度の平均は1.4である（M=1.4）。統計的検定の結果として、２つのケースの間には有意な差があった（t（120）=8.4, p < .001）。

２つの実験において、被験者が示した称賛あるいは非難の総計量と副作用（side-effect）が意図的にもたらされたかどうかについての被験者の判断との間には相関関係が見いだされた（r（120）=.53, p < .001）。

Knobe（2003）の追実験の結果

上記のKnobe（2003）の実験について本稿が追実験を行った結果を、上述のKnobe（2003）の結果とともに以下に示す（図表１）。

本稿の追実験の被験者は、すべて富山短期大学の学生であり、「harm condition」と「help condition」との間において被験者の重複はない。

【被験者】

実験１（first experiment）

自然環境破壊ケース（harm condition）：98名（男子13名・女子85名）

自然環境改善ケース（help condition）：98名（男子16名・女子82名）

実験２（second experiment）

砲撃ライン突入ケース（harm condition）：106名（男子18名・女子88名）

砲撃ライン脱出ケース（help condition）：95名（男子12名・女子83名）

図表１

			本稿	Knobe（2003）
実験1	自然環境破壊ケース（harm condition）	問1（平均値）	4.4	4.8
		問2（yesの率）	59%	82%
	自然環境改善ケース（help condition）	問1（平均値）	3.4	1.4
		問2（noの率）	77%	77%
実験2	砲撃ライン突入ケース（harm condition）	問1（平均値）	3.8	−
		問2（yesの率）	65%	77%
	砲撃ライン脱出ケース（help condition）	問1（平均値）	3.5	−
		問2（noの率）	56%	70%
合計	harm condition	問1（平均値）	4.1	4.8
	help condition	問1（平均値）	3.5	1.4

＊　実験２の問１（平均値）については、Knobe（2003）にデータの記載がなかった。

なお、実験で用いられた場面設定（vignette）については、本稿の末尾に添付した資料（１～４）を参照されたい[10]。

【統計的検定の結果】

実験１（first experiment）：X^2（1, N=196）＝51.8, p<.001.

実験２（second experiment）: X^2（1, N=211）＝3.6, p<.1.

本稿の追実験の検定結果は、特に実験２ではKnobe（2003）でみられたような結果を得ることができなかったものの、「悪い副作用は良い副作用よりも意図的な行為の結果としてもたらされると感じる」という被験者の判断（直観）の偏りをおおむね検証することができた。

４　Phillips and Knobe（2009）の実験

ここでは、Phillips and Knobe（2009）の実験例を紹介し、その追実験を実施した結果について明らかにする。

Phillips and Knobe（2009）では、自由意思（free will）に関する実験を行っている。本稿では、そのなかからStudy1について追実験を行った。

実験（Study 1）[11]

被験者は、ダーラム（ノースカロライナ州）のあるショッピングセンターでくつろいでいた男女52名であり、以下の２つのケースのどちらかをランダムに提示され、質問に答えた。

道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）

問１　船長がどの程度で道徳的（moral）か。

　　１（very immoral）～７（very moral）の尺度で問われる。

問２　この船長は、妻の荷物を船外に投げることを強いられた（forced）かどうか。

　　１（‘disagree’）～7（‘agree’）の尺度で問われる。

　　（中間は、‘in between’と記されている）

---

[10] 場面設定（vignette）について、Knobe（2003）の原文を日本語訳する際には、もとの文章から被験者が受ける印象をできる限り忠実に再現するように心がけたが、それでも完全な再現はできないことに留意する必要がある。

[11] この実験についても、YouTubeで関連する動画をみることができる。
http://www.youtube.com/watch?v=0dTQh__09ro（2010年10月17日現在）

道徳的に悪いケース（Morally bad condition）

問１　船長がどの程度で道徳的（moral）か。

１（very immoral）～７（very moral）の尺度で問われる。

問２　この船長は、妻を船外に投げることを強いられた（forced）かどうか。

１（‘disagree’）～７（‘agree’）の尺度で問われる。

（中間は、‘in between’と記されている）

道徳的に中立なケース（morally neutral condition）の場面設定（vignette）

While sailing on the sea, a large storm came upon a captain and his ship. As the waves began to grow larger, the captain realized that his small vessel was too heavy and the ship would flood if he didn't make it lighter. The only way that the captain could keep the ship from capsizing was to throw his wife's expensive cargo overboard.

Thinking quickly, the captain took her cargo and tossed it into the sea. While the expensive cargo sank to the bottom of the sea, the captain was able to survive the storm and returned home safely.

道徳的に悪いケース（morally bad condition）の場面設定（vignette）

While sailing on the sea, a large storm came upon a captain and his ship. As the waves began to grow larger, the captain realized that his small vessel was too heavy, and the ship would flood if he didn't make it lighter. The only way that the captain could keep the ship from capsizing was to throw his wife overboard.

Thinking quickly, the captain took his wife and tossed her into the sea. While the captain's wife sank to the bottom of the sea, the captain was able to survive the storm and returned home safely.

実験（Study 1）の結果

問１　２つのケースの間には統計的に有意差があった。

道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）M=5.3

道徳的に悪いケース（Morally bad condition）M=2.4　　t（50）=5.7, p<.001.

道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）の方が道徳的な行動として判断された。逆にいうと、道徳的に悪いケース（Morally bad condition）の方が非道徳的な行動として判断された。

問２　２つのケースの間には統計的に有意差があった。

道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）M=4.6

道徳的に悪いケース（Morally bad condition）M=1.9　　t（50）=4.7, p<.001.

道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）の方が強いられた（forced）行動

として判断された。逆にいうと、道徳的に悪いケース（Morally bad condition）の方が自由意思（free will）にもとづく行動として判断された。

実験（Study 1）から得られた知見（インプリケーション）

現実の人間の一般的な道徳的判断（moral judgment）と、自由（freedom）と抑圧（constraint）についての直観とは、関係があることが明らかになった。

上述のKnobe（2003）の実験結果と共通していることは、道徳的に悪いことをすることに対しては、道徳的に良いことあるいは道徳的に中立なことよりも自由意思（あるいは意図）の存在を強く感じるという現実の人間の一般的な判断の傾向性である。したがって、悪事を働いた結果に対する責任の追及は相対的に厳しくなる。

実験（Study 1）の追実験の結果

上記のPhillips and Knobe（2009）の実験（Study 1）について本稿が追実験を行った結果を以下に示す。

本稿の追実験の被験者は、すべて富山短期大学の学生であり、道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）と道徳的に悪いケース（Morally bad condition）との間において被験者の重複はない。

【被験者】

富山短期大学経営情報学科の学生190名（男子28名・女子162名）

道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）：79名（男子７名・女子72名）

道徳的に悪いケース（Morally bad condition）：111名（男子21名・女子90名）

なお、実験で用いられた場面設定（vignette）については、本稿の末尾に添付した資料（５～６）を参照されたい[12]。

【統計的検定の結果】

以下の検定結果からは、Phillips and Knobe（2009）の実験結果を検証することができたといえる。

問１　２つのケースの間には統計的に有意差があった。

道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）M=5.6

道徳的に悪いケース（Morally bad condition）M=2.0　　t（188）=5.5, p<.001.

問２　２つのケースの間には統計的に有意差があった。

[12] 場面設定（vignette）について、Phillips and Knobe（2009）の原文を日本語訳する際には、もとの文章から被験者が受ける印象をできる限り忠実に再現するように心がけたが、それでも完全な再現はできないことに留意する必要がある。

道徳的に中立なケース（Morally neutral condition）M=5.0
道徳的に悪いケース（Morally bad condition）M=3.6　　t（188）=2.1, p<.01.

おわりに

本稿では、言語の一種としての会計（会計言語：accounting as language）が現実の人間行動のフレーミングに影響を及ぼすという考えから、言語分析と実験哲学の研究成果にもとづいて現実の人間の行動モデルの前提となる人間観を探求した。

言語分析では、語用論（pragmatics）において言語の使用者（話し手）が状況依存的な存在であること（人間観）を明らかにした。実験哲学では、提示された場面設定の内容によって被験者の判断（直観）の偏りがみられることが明らかになった。これは、一般人の直観は多様性や不確かさを持っており、人々の一般的な感覚が論理的な整合性を持たない場合があることを示している。現実の人間の行動のもととなる直観は、おかれている状況に依存することが明らかになった。

また、（紙面の制約により本稿では触れていないが）追実験の設問の回答からは、同じ場面設定であっても被験者によって読み取り方に違い（多様性や不確かさ）があることが分かった。このことは言語によってフレーミングされる現実の人間の姿を表している。

本稿の成果をふまえて、今後は、言語分析と実験哲学における人間観の理解をより深めることで、会計の実験的研究（実験会計学）における会計行動のモデルの設計を進める必要がある。

現実の人間の会計行動に適合する安定的で頑健な会計制度を設計するためには、現実の人間の会計行動（人間観）への深い理解が不可欠であるからである。

参考文献

田中茂次（1995）『会計言語の構造』森山書店.
森田雅憲（2009）『ハイエクの社会理論－自生的秩序論の構造－』日本経済評論社.
水谷覚（2010）「実験会計学における方法論」『富山短期大学紀要』第45巻.
山地秀俊（2008）「実験会計学」『産業経理』第68巻第2号.
Anthony, R. N. and Breitner, L. K.（2006）*Essentials of Accounting Review*, 9th edition（西山茂監訳（2007）『アンソニー会計学入門【第2版】』東洋経済新報社）
Jones, D.（2009）“The good, the bad and the intentional: Dan Jones on the often surprising part played be moral judgments in our ‘folk psychology’”, *The Psychologist*, Vol.22, pp.-666-669.
Knobe（2003）“Intentional Action and Side Effects in Ordinary Language”, *Analysis*, Vol.63, pp.190-194.

Knobe, J. (2007) "Experimental Philosophy and Philosophical Significance", *Philosophical Explorations*, Vol.10, No.2, pp.119-121.

Knobe, J. and Nichols, S. (2008) "An Experimental Philosophy Manifesto", *Experimental Philosophy*, OXFORD UNIVERSITY PRESS, Chap.1. pp.3-14.

Nadelhoffer, T. and Nahimias, E. (2007) "The Past and Future of Experimental Philosophy", *Philosophical Explorations*, Vol.10, No.2, pp.123-149.

Phillips, J. and Knobe, J. (2009) "Moral Judgment and Intuitions about Freedom", *Psychological Inquiry*, Vol.20, No.1, pp.30-36.

(平成22年10月29日受付、平成22年11月11日受理)

資料 1

【追実験】Knobe（2003）実験 1（first experiment）自然環境破壊ケース（harm condition）

性別：（　　）・年齢：（　　）・学籍番号（　　）

以下の文章を読んで、問いに答えてください（○をつける）。

ある会社の副社長が、会長のところに行って言いました。
「新しい事業を始めようと思っています。その事業は、わが社の利益向上に貢献するでしょうが、自然環境の破壊にもつながるでしょう。」

会長は答えました。
「私は自然環境の破壊については全く関心がない。私が求めるのは、できる限りの利益を出すことだ。その新しい事業を始めようじゃないか。」

問１　会長の行為は、どの程度で非難されるべきであると思いますか？
（０・１・２・３・４・５・６）
＊数字が大きいほど高い非難です

問２　この会長は意図的に自然環境を破壊したと思いますか？
（はい・いいえ）

資料 2

【追実験】Knobe（2003）実験 1（first experiment）自然環境改善ケース（help condition）

性別：（　　）・年齢：（　　）・学籍番号（　　）

以下の文章を読んで、問いに答えてください（○をつける）。

ある会社の副社長が、会長のところに行って言いました。
「新しい事業を始めようと思っています。その事業は、わが社の利益向上に貢献するでしょうし、自然環境の改善にもつながるでしょう。」

会長は答えました。
「私は自然環境の改善については全く関心がない。私が求めるのは、できる限りの利益を出すことだ。その新しい事業を始めようじゃないか。」

問１　会長の行為は、どの程度で称賛されるべきであると思いますか？
（０・１・２・３・４・５・６）
＊数字が大きいほど高い称賛です

問２　この会長は意図的に自然環境を改善したと思いますか？
（はい・いいえ）

資料３
【追実験】Knobe（2003）実験２（second experiment）砲撃ライン突入ケース（harm condition）

性別：（　　）・年齢：（　　）・学籍番号（　　）

以下の文章を読んで、問いに答えてください。

部隊長に上官からの命令が下りました。
「君の部隊をトンプソン丘の頂上にまで送るように。」

部隊長は上官に言いました。
「もし私の部隊をトンプソン丘の頂上に送るとなると、兵士たちは敵の砲撃ラインに直行することになります。彼らのうち何人かは確実に殺されてしまいます！」

上官は答えました。
「いいかい。私は兵士たちが砲撃ラインに至るであろうことを知っているし、彼らのうち何人かは殺されるであろうことも知っている。しかし、私は我々の兵士たちに何が起こるのかについては全く関心がない。私の関心は、トンプソン丘を制圧することだけなのだ。」

その部隊はトンプソン丘に送られた。想定通り、兵士たちは敵の砲撃ラインに直行し、彼らのうち何人かは殺された。

問１　この上官の行為は、どの程度で非難されるべきであると思いますか？
（０・１・２・３・４・５・６）
＊数字が大きいほど高い非難です

問２　この上官は兵士たちを意図的に敵の砲撃ラインに送ったと思いますか？
（はい・いいえ）

問３　問２について何故そう思いましたか？理由を書いてください。

資料４
【追実験】Knobe（2003）実験２（second experiment）砲撃ライン脱出ケース（help condition）

性別：（　　）・年齢：（　　）・学籍番号（　　）

以下の文章を読んで、問いに答えてください。

部隊長に上官からの命令が下りました。
「君の部隊をトンプソン丘の頂上にまで送るように。」

部隊長は上官に言いました。
「もし私の部隊をトンプソン丘の頂上に送るとなると、兵士たちは敵の砲撃ラインを脱出することになります。彼らは救出されるでしょう！」

上官は答えました。
「いいかい。私は兵士たちが砲撃ラインを脱出するであろうことを知っているし、そうしなければ彼らのうち何人かは殺されるであろうことも知っている。しかし、私は我々の兵士たちに何が起こるのかについては全く関心がない。私の関心は、トンプソン丘を制圧することだけなのだ。」

その部隊はトンプソン丘に送られた。想定通り、兵士たちは敵の砲撃ラインを脱出し、それによって彼らは殺されずにすんだ。

問１　この上官の行為は、どの程度で賞賛されるべきであると思いますか？
（０・１・２・３・４・５・６）
＊数字が大きいほど高い賞賛です

問２　この上官は兵士たちを意図的に敵の砲撃ラインから脱出させたと思いますか？
（はい・いいえ）

問３　問２について何故そう思いましたか？理由を書いてください。

資料 5

【追実験】Phillips and Knobe (2009) 実験 1 (Study 1) 道徳的に中立なケース (morally neutral condition)

性別：(　　)・年齢：(　　)・学籍番号（　　）

以下の文章を読んで、問いに答えてください（○をつける）。

航海中の小舟を大嵐が襲った。波はどんどん大きくなり、積荷を軽くしないことには、この小舟はやがて浸水してしまうことに船長は気付いた。転覆を避けるために船長ができることは、ただ一つ、妻の高価な荷物を船外に投げ捨てることだけだった。

とっさに考えて、船長は、妻の荷物を海に投げ捨てた。高価な荷物は海の底に沈んだが、船長は嵐を乗り越え、無事に帰港することができた。

問１　船長の行為は、どの程度で道徳的だと思いますか？

（１・２・３・４・５・６・７）

＊数字が大きいほど道徳的

問２　船長は妻の荷物を船外に投げ捨てることを、どの程度強制されたと思いますか？

（１・２・３・４・５・６・７）

＊数字が大きいほど強制的

問３　問１について何故そう思いましたか？理由を書いてください。

問４　問２について何故そう思いましたか？理由を書いてください。

資料 6

【追実験】Phillips and Knobe（2009）実験 1（Study 1）道徳的に悪いケース（morally bad condition）

性別：(　　)・年齢：(　　)・学籍番号（　　）

以下の文章を読んで、問いに答えてください（○をつける）。

航海中の小舟を大嵐が襲った。波はどんどん大きくなり、積荷を軽くしないことには、この小舟はやがて浸水してしまうことに船長は気付いた。転覆を避けるために船長ができることは、ただ一つ、妻を船外に投げ捨てることだけだった。

とっさに考えて、船長は、妻を海に投げ捨てた。妻は海の底に沈んだが、船長は嵐を乗り越え、無事に帰港することができた。

問１　船長の行為は、どの程度で道徳的だと思いますか？

（１・２・３・４・５・６・７）

＊数字が大きいほど道徳的

問２　船長は妻を船外に投げ捨てることを、どの程度強制されたと思いますか？

（１・２・３・４・５・６・７）

＊数字が大きいほど強制的

問３　問１について何故そう思いましたか？理由を書いてください。